



京都府印刷工業組合

新年号

NEW YEAR ISSUE

京印季報

Kyoinkiho

2024 NEW YEAR



Special Contents:

新春特別企画

シリーズ京の100年企業を訪れる

「日本紙工株式会社 林重衛代表取締役役に聴く」



2024 NEW YEAR



- 1 | 巻頭言／京都府印刷工業組合 副理事長 高橋 東作
- 2 | 年頭所感／京都府印刷工業組合 理事長 笹原あき彦
- 3 | 京都府知事 西脇 隆文
- 4 | 京都市長 門川 大作
- 4 | 京都商工会議 会頭 塚本 能交
- 5 | 京都府中小企業団体中央会 会長 阪口 雄次
- 5 | (一社)日本印刷産業連合会 会長 北島 義斉
- 5 | 全日本印刷工業組合連合会 会長 滝澤 光正
- 6 | 京都府製本工業組合 理事長 大入 達男
- 6 | 京都府紙器段ボール箱工業組合 理事長 戸田 正和
- 6 | (一社)日本グラフィックサービス工業会京都府支部
- 7 | 支部長 立木 哲生
- 7 | 京都紙工協同組合 理事長 西村 公男
- 7 | 京都シール印刷工業協同組合 理事長 山田 裕彦
- 7 | 京都グラフィックコミュニケーションズ協同組合
- 8 | 理事長 木村 進
- 8 | 新春特別企画 シリーズ 京の100年企業を訪れる
- 12 | 「日本紙工株式会社 林重衛代表取締役役に聴く」
- 13 | 2023 全日本印刷文化典広島大会開催
- 13 | 全印工連組合功労者顕彰を受ける
- 13 | 北部地域懇談会開催
- 14 | ～印刷感謝祭～ 本木祭並びに組合員物故者を偲ぶ会開催
- 15 | 環境労務対策セミナー開催
- 16 | ～京都ものづくりフェア2023～ 京都府印刷関連団体
- 17 | 協議会と合同出展(リアルパート・Webパート)
- 17 | 中央職業能力開発協会会長表彰を受ける
- 17 | 京都府職業能力開発協会会長表彰を受ける
- 17 | 秋期研修会開催
- 18 | 委員会だより／共済委員会
- 19 | 支部だより／上支部
- 20 | 中支部
- 20 | 下支部
- 20 | 東山支部
- 21 | 会合だより／京都府印刷関連団体協議会
- 22 | 京都印刷協和会
- 22 | 京都青年印刷人月曜会
- 23 | いそじ会
- 23 | 統計だより／材料価格定点調査・集計結果より
- 24 | 最近の業界トピックについて
- 25 | 10月・12月定例理事会開催概要
- 25 | 事務局からのお知らせ
- 25 | よしみ散歩 ～印刷会館周辺地域のご紹介～
- 26 | 印刷会館利用状況
- 26 | 組合日誌
- 27 | 組合員異動
- 27 | 賛助会員異動
- 27 | 表紙作画者紹介
- 27 | 編集後記

あけましておめでとうございます。

皆さまにおかれましては健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

今年度は役員改選の年です。私も今期で8期16年させていただいた副理事長を退任させていただきます。

在任中は2014年に全日本印刷文化典京都大会が40年振りに京都で開催され、2022年には組合創始130周年記念式典が開催されました。いずれも組合員の皆様の協力により意義あるものとなりました。

組合は組合員の皆様から「連帯・共済・対外窓口」の役割が求められていると言われております。少しでもお役に立てていたら永年お役をお預かりしていた手前、救われる気がします。

日本の印刷市場は縮小しています。その予測のもとにこの20年間「業態変革」に始まり「ソリューションプロバイダーへの進化」そして今「高付加価値コミュニケーションサービス産業への転換」が提言されています。機会あるごとにご紹介させていただきましたが、参考にしていただけましたでしょうか。問題意識を共有できても、従業員の皆様と手を携えて行動レベルに落とし込むには、各社の事情をふまえながらご苦勞をされている事と拝察します。

表現はいろいろ変わりますが、要は、市場が縮小しているので、事業の継続・拡大をしていく為には、事業領域の見直しをしましと提言されているものと解釈しています。

高齢化社会では、就業年齢の平均が上がり、従業員の平均年齢が上がっていくのは自然の成り行きですが、組合員各社のご努力により、若い人達が印刷業界に未来を感じ、印刷事業に従事していただく、そんな事業領域に拡大していくことを夢見ながら、新年の挨拶とさせていただきます。



<https://kyoinko.jp/>



京都府印刷工業組合

副理事長 高橋 東作

年頭所感

新年を迎え

京都府印刷工業組合
理事長

笹原あき彦



あけましておめでとうございます。

組合員、並びに賛助・パートナーシップ会員の皆様におかれましては、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中は組合活動にご理解とご協力を頂き心から感謝申し上げますと共に厚く御礼申し上げます。本年も何卒変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、昨年5月には新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが二類から五類に移行し、行動に制約が求められることがなくなりましたが、長引いたコロナ禍の間にはIoTや人工知能といったデジタル技術の進展、世界的な脱炭素の動き、働き方改革などにより、私達の価値観や日常の生活様式にも大きな変化をもたらしました。この社会の変化は今までまかり通っていた行動言動、ものの考え方、価値観が明日からはそのまま通用しなかったり、あるいは違法となることさえあり、それらを一人一人がアップデートせざるを得ないという、私達を取り巻く経済環境は今までに経験をしたことがないほどの、とてつもなく大きく、そして猛烈なスピードで今なお変化を続けています。

あらゆる面での多様化が加速し、世界的にも経済活動の潮目が大きく変わろうとしている中、私達が経営の舵取りをどこに向け、定めるべきなのかを極めて困難な状況に追い込んでいます。

『変化に未来を求めて』

これは令和3年に迎えた組合創始130周年事業のキャッチフレーズですが、そこには「時代時代の流れを的確に捉え、自ら変化をもって流れに対応することこそが、未来へとつながる道なのだ」というメッセージが込められていると思います。そして経済の潮目が大きく変わろうとしている“今”こそが、我々自身が変化することを恐れることなく、社会の流れに沿う新たな一歩を踏み出す時かと思っています。

組合員の皆様には、この社会の変化を自社発展の好機と捉えて頂き、京印工組の事業(全印工合が提唱)である、IoTによる「収益の見える化」、DXによる生産性向上、MISの活用活性化の推進、そして総務・経営・環境労務・教育・厚生・組織・共済・広報・ダイバーシティ推進など諸事業をご活用頂き、だれ一人取り残されることのない全組合員の“業態変革”、すなわち「変化に未来を求めて」のヒントとなりましたら幸いに存じます。

2024年の干支は甲辰(きのえたつ)。辰は十二支の中で唯一空想上の生き物で、その力強さから隆盛の象徴であり、勇気、粘り強さ、知性のシンボルとしても描かれ、大変縁起が良いとされています。また、甲は事の始まり、辰は発芽した植物がしっかりとした形になることから、この二つが合わさる甲辰は、新しく取り組むことや、いままで準備してきたことが形になり成功する縁起のよい年といわれています。

結びにあたり、残りの在任期間も微力ながら全力を尽くして業界・組合のために精進してまいります。どうか組合員、賛助・パートナーシップ会員の皆様方からも従前にも増して、ご支援・お力添えを賜りますことをお願い申し上げまして、新年度のご挨拶に代えさせていただきます。

組合員、賛助・パートナーシップ会員の皆様にとりまして、本年が健やかで幸多き一年でありますよう心からご祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

活力にあふれ 誇りの持てる 京都づくりへ

京都府知事

西脇 隆俊



明けましておめでとうございます。組合員の皆さまにおかれましては、つつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年を振り返りますと、まず新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症に変更され、世の中が少しずつ日常を取り戻しました。長きにわたり感染防止対策にご協力いただいた皆さま、そして、医療従事者をはじめ関係の皆さまに、心から感謝と敬意を表します。そして、明治以来中央省庁で初となる文化庁の京都移転が実現しました。千年にわたる歴史と文化が日々の生活に息づく京都で国と協力して新しい文化政策を創り上げることは、京都のみならず日本全体の地方創生推進に向けての大きな一歩であり、私たちは着実に新たな歴史の扉を開けつつあります。

「進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む」。これは、明治時代に活躍した啓蒙思想家・福沢諭吉の言葉です。目まぐるしく社会が変化を続ける現代において歩みを止めることは、後退するに等しいかもしれません。しかし、時代の変化を柔軟に受け容れながら、受け継がれてきた伝統に常に新しい息吹を吹き込む営みは、これまで京都が脈々と続けてきたことであり、これからも京都が担っていくことです。時には歩みを止めて振り返ることも必要ですが、社会が歴史的な転換点を迎えている中、小さな歩みを積み重ねて大きな前進につなげ、新しい価値を常に生み出し続け、活力にあふれ誇りの持てる京都づくりを進めてまいります。

来年には、いよいよ大阪・関西万博が開幕します。新名神高速道路も全線開通に向け、着実に整備が進められています。私たち京都が得意とする交流の力を発揮して、多くの人、企業、文化の「新しいつながり」を創り、伝統と革新を融合させながら、未来の京都を担う人や企業を育て、文化を創ってまいります。そして、「文化の都・京都」を世界に発信しながら、世界の人たちを京都府全域でおもてなししたいと考えております。

今年は辰年です。雲を払い、蒼天に向かって昇っていく龍のように、私たちに託された京都の未来に向けて、京都府総合計画に掲げた一つ一つのプロジェクトを大きく動かしてまいります。

今年一年の皆さまのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げ、新年のごあいさつといたします。

感謝をこめて ～魅力あふれる 京都を未来へ～

京都市長

門川 大作



あけまして、おめでとうございます。

この一年の皆様の御多幸を、お祈り申し上げます。

市長の任期もあと2箇月となりました。4期16年間、京都のまちづくりが大きく前進したと御評価いただけるのも、市民、事業者の皆様の深い御理解と御尽力があればこそ。改めて深く御礼申し上げます。

「課題は現場にある、しかし、答えも解決する力も現場にある」。私は市長就任以来、そんな信念で現地現場主義を貫いてきました。市民の皆様と共に汗する「共汗」を大切に、大好きな京都のために全力を尽くす感動と感謝の日々でした。

振り返ると、2008年、リーマンショックからのスタートでしたが、市民の皆様と共に議論を重ねてあらゆる施策を展開しつつ、職員一丸となった行財政改革に注力。その結果、厳しい財政状況が続く中でも、全国トップ水準の福祉、教育、子育て支援、安心・安全、景観、文化政策等を充実させ、京都の都市格が大きく向上しました。

そして、私の4期目の最大の責務は「抜本的な財政改革」。そこに想定外の「コロナ危機」。市民の皆様の命と暮らしを守り抜く。同時に、不退転の覚悟の下、フルオープンの場で徹底した議論を重ね、更なる改革を丁寧な説明を心がけつつ断行。その結果、10年以上かかるとされた収支均衡を2年で達成。これは、国・府との緊密な連携による徹底した市民・事業者の皆様の下支え、長年の都市の成長戦略による担税力の強化が市税収入の増加(過去最高)に繋がったこと。さらには、徹底した効率化等による人件費の削減、理念を大切にしつつ本市独自施策の持続可能な観点での見直しによる歳出削減など、様々な要素が相まって実現したものです。これらもすべての市民、事業者の皆様の京都への愛情、日々の弛まぬお取組の賜物。改めて感謝申し上げます。

超高齢社会を見据え、これからが大切です。更なる子育て支援、住居や働く場の創出をはじめとする人口減少対策、そして、改革を続けつつ、足腰の強い財政へ。同時に、「新・文化庁」や京都駅東部・崇仁に移転・開校した京都芸大・美工高等を中心に、幅広い地域で文化を基軸とした都市経営を一層推進。任期の最後まで、京都の最大の宝である「地域力」「文化力」をいかしたまちづくりに力を注ぎ、素晴らしいリーダーに継承してまいります。

文化首都・京都の発展へ。一層の御指導をお願い申し上げます。

京都経済の 未来に向けて、 新たなステージへ 踏み出そう

京都商工会議所
会頭

塚本 能交



謹んで新年のごあいさつを申し上げます。

本年の干支は、「甲辰(きのえ・たつ)」です。「辰」、すなわち龍は十二支で唯一架空の動物であり、現実を超えたパワーがダイナミックに働き、変化をもたらすと考えられています。昇り龍のように活気あふれる1年にしたいものです。

今、京都経済全体は持ち直し基調にあります。原材料・エネルギー高、人手不足や賃上げ等、事業者には厳しい経営環境が続いています。40年ぶりとなる物価上昇の中で、デフレを完全に脱却し、新たな経済のステージに移行していくためには、労務費を含む適切な価格転嫁と生産性向上を進め、あらゆる事業者が物価上昇に負けない持続的な賃上げができる環境を整備し、経済の好循環を生むことが不可欠です。

加えて、課題解決・目的実現に向けた新たな挑戦する場として地域を変革する「ローカル・トランスフォーメーション」の推進が、今後重要になると考えています。コロナ禍をきっかけに急速に進んだデジタル化によって、人々の生活様式やビジネススタイルが大きく変化し、価値観も多様化しました。時間や場所に捉われない柔軟で多様な働き方が広がる中、地方創生の点からも、人財を地域に定着させることが求められています。

京都には伝統からハイテクまで多岐にわたる産業を担う企業と、大学や研究機関など多様な産学が集積しています。一方で現在15万人の学生が学ぶ街でありながら、その多くは卒業後に離れてしまいます。産学が協働して人財を育て、企業も「働きがい」や「働きやすさ」といった魅力を発信することで、人財が京都に定着する環境を構築することが必要だと感じています。

同時に、培われてきた文化や風情など、京都の魅力を国内外へ発信し、まちとしての求心力を高めることも重要です。本所が整備を進め、2月に完成を迎える「文化と産業の交流拠点(仮称)」を活用しながら、文化を活かした産業振興と新たな価値創造に挑戦してまいります。

また来年4月の大阪・関西万博の開幕に向け、来場者を京都へ呼び込むべく、京都が持つ文化と産業の魅力を国内外に発信する必要があります。観光誘客のみならず、投資や人財を呼び込み、波及効果をしっかり取り込めるよう、引き続きオール京都で取り組んで参ります。

京都経済の未来に向けて、「VIVID KYOTO 〜しなやかにともにいきる〜」のスローガンのもと、会員の皆さまとともに新たなステージへと進む1年にしたいと考えております。皆さまの一層のご支援とご協力を心からお願い申し上げます。新年の挨拶とさせていただきます。

ポストコロナ時代を 生き抜く 新たなチャレンジ

京都府中小企業団体中央会
会長

阪口 雄次



年頭のご挨拶を申し上げます。

令和6年の干支は甲辰(きのえ・たつ)です。植物が成長するようにどんどん勢いを増して増えていくという意味があると陰陽五行説で説かれております。

3年半に及んだコロナ禍の困難な状況の中でも、未来に向け努力をしてきたことが実を結び成熟する年になるとも解釈できます。

社会環境が大きく変化していく流れの中、ポストコロナ時代における「ニューノーマルへの対応・ライフスタイルの変化への対応」、「デジタル化による価値の創造・イノベーションを生むための土台づくり・事業再構築のための環境整備」等々、我々中小企業・小規模事業者にとって新たなチャレンジが求められています。

そこで本年度の取り組みとして令和3年に立ち上げた「助け合い」による課題解決を目指す「助け合い隊」事業を中央会の取り組み事業の軸に据えて組合連携を一層密にし、現場目線で議論を深め、諸課題への対応を図ってまいります。加えて「助け合い隊」により課題解決した成果事例・対応事例を公開することで、水平展開も図ってまいります。更に組合・組合員が持つ「強み」や「技術」をPRできる機能を実装し、より実効的な事業展開ができるよう活動してまいります。

また、「新しい働き方検討委員会」では、主要テーマを「ポストコロナ時代の『人的資本』への投資と企業価値の向上」と掲げ、働き方の本質を追求し、働き甲斐を高めることにより生産性の向上・人材確保、人材定着を図り、ひいては企業価値の向上に繋げるべく議論を深め、持続可能な経営が実現できるよう事業活動を行っており、本年は更に充実した対応プランを会員組合、会員企業に提供してまいります。

中小企業だからといって、避けては通れない様々な課題に対し、覚悟を持って全力で課題解決に向け取り組んでまいり所存です。

本年辰年は、勢いよく活気あふれる年になるとも言われております。中央会総員一丸となり、その勢いに乗れるよう、全力で事業展開を図ってまいります。

京都府・京都市並びに関係団体のご支援と会員組合各位のご理解、ご協力を切にお願い申し上げます。

結びに、本年が皆様にとりまして健康で幸多い年になりますことを心からお祈りし、年頭のご挨拶とさせていただきます。本年も何卒宜しくお願い申し上げます。

年頭所感

(一社)日本印刷産業連合会
会長

北島 義斉



令和6年の新春を迎え、謹んでご挨拶を申し上げます。
旧年中は、日本印刷産業連合会(日印産連)の運営に多大な
ご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年の日本経済は、新型コロナウイルス感染症による行動
制限が緩和され、経済活動の正常化が進み、個人消費やイン
バウンド需要が増加傾向になるなど、緩やかな回復が見られ
ました。一方で、地政学リスクが長期化するなか、世界的な
金融引き締めによる景気減退懸念に加え、物価上昇や急激な
為替変動など、先行き不透明な状況が続きました。

印刷業界では、原材料価格やエネルギー費の高騰など、厳
しい経営環境が続くなか、デジタル技術を活かして働き方や
暮らしを変革する「DX(デジタルトランスフォーメーション)」も進んでいます。情報媒体のデジタルシフトは、紙媒
体の需要減という面だけでなく、製品・サービス等の付加価
値を最大化するビジネスモデルの構築やビジネスチャンスの
拡大、経営の変革にもつながっていくものです。また、地球
環境に対する人々の意識の高まり等による、新たな需要も見
込まれています。

こうしたなかで日印産連は、2015年に制定した「日印産
連ブランドデザイン」に基づく活動を継続してきました。し
かしながら、制定から8年が経過したことに加え、特に
2020年からのコロナ禍の影響も大きく、人々の生活や仕事
をはじめ、印刷産業を取り巻く事業環境が大きく変わりました。こうした状況を踏まえ、昨年12月に、「ブランドデザイン2030」再構築プロジェクトを発足しました。SDGsの目標
達成年である2030年の印刷産業のあるべき姿を見据え、未
来を切り開く新しい印刷産業の姿を描いていきます。

従来の「印刷」を再定義して新しい印刷産業の姿を示す
「ビジョン」、そのビジョンの実現に向けて日印産連が取り
組む「ミッション」、そのミッションを果たしていくための
具体的な「アクションプラン」を策定していく予定です。また、経済産業省をはじめとした関係省庁や関連業界団体の皆
様とも連携し、新たな産業イメージの構築と発信に努めま
す。印刷産業として、さらなる事業領域の拡大や付加価値の
創出を進め、持続可能な環境・社会・経済の実現に取り組ん
でまいります。

「2024新年交歓会」は、人数制限を解除させていただ
き、多くのご来賓や会員企業の皆様一堂に会する形で、盛
大に開催いたします。また、今年5月には、8年ぶりとなる
世界最大の印刷機材展「drupa 2024」に合わせて、WPCF
(世界印刷会議)が同時開催されます。各国の印刷関係者との
情報共有を図るとともに、日本の印刷産業の現状や取り組み
などを発信する機会としていきます。

日印産連はこれからも、会員10団体の皆様との連携を一
層深めて、業界の持続的な発展に努めてまいります。皆様
には、これまで以上のご支援、ご協力をお願い申し上げます
とともに、さらなるご繁栄とご健勝を祈念して、新年の挨拶と
させていただきます。

新年のご挨拶

全日本印刷工業組合連合会
会長

滝澤 光正



明けましておめでとうございます。

旧年中は当連合会に格別のご支援、ご協力を賜り厚く御礼
申し上げます。本年も一層のご指導を賜りますようお願い申
し上げます。

昨年10月に5年ぶりに開催いたしました「2023全日本印
刷文化典広島大会」におきましては、全国から580名を超え
る方々にご参集をいただき、全印工連の団結と協調、さら
には将来の業界発展に向けての課題や方向性の共有を実現す
ることができました。全国の印刷工業組合の役員、組合員、関
連業界の皆様のご理解とご協力の賜物と深く感謝を申し上げ
る次第です。

さて、全印工連では引き続き各種事業への取り組みを精力
的に進めておりますが、特に昨年は、二つの大きな成果を上
げることが出来ました。一つは、夏に「見て、触って体験す
るユニバーサルデザイン」をテーマに、全印工連では初とな
る「伝えるためのユニバーサルデザインフェア」を開催し、
多くのご来場者を迎え、またマスコミにも取り上げられ全印
工連のMUDへの取り組みに対する高い評価を得ることがで
き、その延長上にあるSR調達の推進に向けての確固たる足
がかりを築くことができました。

もう一つは、「グリーン購入法印刷用紙に係る判断基準の
見直し」です。ここ数年にわたり全日本印刷産業政治連盟と
連携し、自由民主党中小印刷産業振興議員連盟の支援を得
て、国に対して「グリーン購入法印刷用紙に係る判断基準の
見直し」を求めてきましたが、昨年6月に特定調達品目検討
委員会のもとに印刷用紙専門委員会が設置され、私も委員と
して招集され、会議の中で何度も即時の課題解決を求める発
言をしてまいりました。その結果、古紙パルプ配合率の最低
保証撤廃をはじめとする大幅な見直しが検討され、グリーン
購入法適合紙の流通量の増大、各製紙メーカーの適合品一
覧表の作成と公開、国による全国官公庁調達担当者宛の文書発
出による周知徹底、また供給に係る政府相談窓口の設置など
の各種対応策の実施が決定され、ようやくここ数年の懸案で
あった官公需の繁忙期に備えた受注体制を整えることが出来
ました。

全印工連は本年もブランドスローガンである「Happy
Industry 人々の暮らしを彩り幸せを創る印刷産業」へと繋
がる各種事業を積極的に推進するとともに、併せて中小印刷
産業振興議員連盟との連携による官公需取引改善への対応な
ど、全印工連の組織力を存分に活かした事業活動に全力を挙
げて取り組み、中小印刷産業共通の課題解決に向け一層邁進
してまいります。

2024年が皆様にとって明るく希望に満ち溢れた素晴らしい
一年となりますよう心から祈念いたしまして、年頭のご挨拶
といたします。

年頭所感



京都府製本工業組合
理事長

大入 達男

明けましておめでとうございます。
平素より組合へのご協力をいただきま
して誠にありがとうございます。

さて、本組合はこの2024年に組合
創立100周年という大きな節目を迎え
ます。この節目では100年を振り返り、
工夫や努力など歴史からの学びを行う
ことを考えております。各社の技術や
工夫の積み重ね、道具や機器の変遷、
乗り切ってきた困難と工夫、関わって
きた人々、組合との関わりなどなど製
本を中心に関連団体も含めた広い視野
での歩みを振り返りたく思います。

100年という時間は世代で言えばお
およそ3代と考えられます。3代であ
ればその歴史は想像ではなく口伝とい
う確かな事実が伝えられるとても重
要な時間です。その確かな歴史をまとめ
資料化し後世に伝えていくのは今この
時しかありません。この歴史をまとめ
た「製本100年史」の発刊を100周年
記念事業として執り行います。

編纂にあたっては、磯部敦先生(奈
良女子大学教授)が全体の監修を行
い、安井海洋先生(常葉大学等非常勤
講師)が磯部先生と共に工場を訪ねて
資料の収集やインタビューを行いま
す。この大切な機会に自社の伝え残し
ておきたい歴史をぜひお話してくだ
さい。ご協力のほど、よろしくお願い
いたします。

今後も様々な荒波が押し寄せてくる
ことが予想されます。冊子が完成した
暁には書棚に飾っておくのではなく、
これからの100年を考える時、改めて
諸先輩の知恵や工夫を知ること荒波
を乗り切っていくための羅針盤になれ
ばと考えております。

末筆ではございますが皆様のご多幸
とご繁栄をお祈りいたしております。

新年のご挨拶



京都府紙器段ボール箱工業組合
理事長

戸田 正和

新年あけましておめでとうございます。
令和6年の新春を迎え、謹んで新
年のご挨拶を申し上げます。旧年中は
当組合の運営にご支援、ご協力を賜り
厚く御礼申し上げます。

昨年は、ウイズコロナのもと、経済
活動もほぼ正常に戻り、円安の影響に
より外国人の訪日客がコロナ前を上回
りました。京都にも多くの観光客が京
都に訪れていただきました。

物価上昇のもと、材料費の値上げ、
燃料の高騰など経営環境は厳しいです
が、各社の粘り強い値上げ交渉の結
果、受注は伸び悩みましたが、何とか
利益は確保できた模様です。

地球温暖化防止と環境保護の観点か
ら、今後プラスチック製品から紙製品
への転換が加速するものと思われま
す。組合としてはそういった時代の趨
勢に遅れないよう各社に情報発信を
して行きたいと思ひます。特に人手不
足による外国人採用、賃上げによる人
件費UP、高付加価値商品の開発、販売
促進のための展示会開催、中小零細
企業のデジタル化等々の政策に対して
研修会開催や助言、情報の発信をし
ていきたいと思ひます。また、印刷関
連7団体との緊密な情報交換のもと連
携していきたく思ひます。

今年当組合は役員改選の年であり、
人事の若返りを図ります。5月の総
会以降から新体制のもと新しい政策
戦略を実行していく積りであります。

また今年、当組合は創立60周年を
迎えるにあたり、5月17日に京都東
急ホテルで記念式典を開催いたします。
つきましては、多数の方々にご参加
をお願いいたしますと共に、新年の
ご挨拶とさせていただきます。

新年ご挨拶



(一社)日本グラフィックサービス工業会
京都府支部 支部長

立木 哲生

明けまして、おめでとうございます。
旧年中は、当会に対しまして、並々
ならぬご厚情を賜りまして、厚く御
礼申し上げます。

段階的だと予測されていた既存の
印刷需要の減少スピードはコロナ禍
を経て、更に加速しています。追い
打ちをかけるようにロシアのウクラ
イナ侵攻による経済制裁や世界の金
融施策の影響を受け、用紙価格、電
気代等々の資機材・燃料価格上昇が
中小印刷業の利益を圧迫してござい
ます。外国人旅行者の受け入れ制限
の撤廃をはじめとするコロナ対策の
緩和で少しずつ経済活動が回復して
おり、大手シンクタンク数社が発表
した日本経済の見通しでも、緩やか
な持ち直し傾向が示されていますが
、歯止めのかからない物価高が内
需回復のスピードを鈍化させてござ
います。

そして、政府主導の経済対策で既
存の印刷需要そのものが大きく戻
ることはもうありません。私たち中
小印刷業は、自ら新たな仕事を創
り出し、社会、顧客に必要なとさ
れる業種・業界となっていかなけれ
ばなりません。

当会といたしましても、メンバー
各社とともにこの変化に対応すべ
く、本部とも連携して、勉強会・
セミナーなどを通して、試行錯誤
している状況です。

今後も同じ京都で同業の企業活動
している京都府印刷工業組合の皆
様と、親睦、情報交流を深めて参
れたらと考えております。

最後になりますが、今年一年が皆
様方にとって意義のある充実した
一年となりますよう祈念いたしま
して、年頭のご挨拶といたします。
何卒引き続き、ご指導、ご鞭撻の
程、宜しく願い申し上げます。

新年のご挨拶



京都紙工協同組合
理事長

西村 公男

あけましておめでとうございます。
令和6年は、干支歴では「甲辰(きのえたつ)」の年となります。「甲」は、十干で最初に出てくるもので生命や物事の始まり、成長を意味します。「辰」は自然万物が振動し、草木が成長して活力が旺盛になる状態を表します。この二つの組み合わせである甲辰には、「成功という芽が成長していき、姿を整えていく」といった縁起の良さを表しています。

新型コロナウイルス感染症も昨年5月から「5類感染症」となり京都への観光客やインバウンド(訪日外国人)もコロナ前の状態に戻り、観光・宿泊・飲食では人手不足が顕著となり景気が回復している事が実感されます。オーバーツーリズムの問題もありますが観光都市京都は近年ラグジュアリーホテルが続々と誕生し話題を集めています。来年には大阪・関西万博が開催され、印刷関連の需要増加が期待されます。

本年、京都紙工協同組合は、大正13年5月15日紙截・製本・帳簿業者で「京都製本紙截同盟会」設立から100周年。昭和28年10月「京都紙工組合」を創立、昭和49年12月23日「京都紙工協同組合」に改組から50周年を迎えます。

5月25日(土)、京都東急ホテルで「創立100周年、改組50周年」の式典を行いますので多数のご出席をお待ちしております。

今年が明るく希望に満ちた年となることを心からご祈念いたしまして新年のご挨拶とさせていただきます。

年頭所感



京都シール印刷工業協同組合
理事長

山田 裕彦

皆様、あけましておめでとうございます。

新しい年を迎えるにあたり謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

昨年を振り返りますと、なんと言っても10月に京都府印刷関連団体の管外研修で、綾部のタマヤ株式会社様を見学させていただいた事が、一番印象に残っています。同社への訪問は、2020年に私ども京都シール組合が担当して行く予定だったのが、新型コロナウイルス感染症の蔓延で中止となってしまった企画でした。コロナが五類に移行してようやく叶った訳ですが、その想いを引き継いで下さった戸田理事長様を中心とした京都府紙器段ボール箱工業組合様に厚く御礼申し上げます。タマヤ様の後に訪れたグンゼ記念館も、とても素敵ところで、本当に勉強になりました。

それから、あと一つ思い出に残った事は11月に開催された京都府ものづくりフェアです。1日ではありましたが、4年ぶりの通常開催で制限なく子供達と触れ合えた事が何よりも良かったと思っています。今回の出展でシールラリーも復活し、各団体がそれぞれの特徴を生かしご来場の皆さんに楽しんでいただきました。印刷業界を身近に感じてもらえた上に、「感謝状」及び「奨励賞」もいただけて本当に良かったです。

今後も、更に印刷業界の仕事の面白さを親御さんも含めて世の中に伝えていけるよう私達は活動していきたいと思っています。

最後になりましたが、印刷業界の益々のご発展と会員の皆様のご多幸を祈念いたしまして、私の挨拶とかえさせていただきます。

年頭所感



京都グラフィック
コミュニケーションズ協同組合
理事長

木村 進

新年明けましておめでとうございます。

旧年中は格別のご交誼を賜りましてありがとうございました。本年もよろしくお願い申し上げます。

皆さんが予想されていた通り、2023年は激動の一年となりました。一番の印象は予想以上の仕事量の減少でした。これからが正念場となると思われます。連携できる場所を捜し、互いに協力し合う一年にできればと願っています。

振り返りますと、私たちにとっての一年は資源高がもたらした、資材価格の高騰です。あらゆるところに影響を及ぼし、今だに治まりがつかない状態が続いています。去年のヒット商品番付けで、とくに印象に残っているのは物価上昇です。私達の家庭までも直撃しました。物価上昇から賃上げを引くと実質賃金がマイナスです。一番辛い思いをされているのが、家庭のやり繰りをされている奥さん方だと思います。当分の間、解消されないのではと思うと忸怩たる思いです。

新しい年を迎えました。コロナ禍も第五類に移行しました。空の行来も活発さを取り戻し、新幹線の乗客も増えて来ました。インバウンドも戻って来ました。人の往来が増えてくると、景気が良くなってくると昔から言われています。今年こそ、協力できる場所を見つけ、一歩踏み込んだ組合活動が出来ればと願う一年です。良いことがあると信じて、今年こそ、よろしくお願い致します。



シリーズ 京の100年企業を訪れる

「日本紙工株式会社 林重衛代表取締役 に聴く」

パッケージを核に トータルサービスを追求する

100年を超えて経営を続けておられる組合員事業所様を訪問し、その歴史と魅力をシリーズで紹介する企画「シリーズ 京の100年企業を訪れる」。第17回目の今回は、「社会の要請にこたえ、社業を発展させ、文化の産業と発展に寄与する」を社是として、パッケージを核としたトータルサービスを追及されている日本紙工様取材させて頂きました。

大正9年、タバコのパイプを製造する会社として創業後、いち早く厚紙印刷機を導入するなど他社との差別化を図るとともに、事業部毎に得意な分野を確立されました。その間、タバコの専売化や取引先の流動など数々の困難に対峙しても、自社の得意な技術を活かして新たな需要を開拓するその経営手法には、多くの組合員の皆様にも参考になるのではないのでしょうか。是非ご一読下さい。

日本紙工株式会社 会社概要

創業	大正9年(1920年)
代表者	林 重衛(代表取締役)
本社	〒601-8212 京都市南区久世上久世346
電話	075-932-4811
事業内容	パッケージ(美術印刷紙器・医療化粧箱・食品化粧箱・たばこ包材・美粧段ボールケース・段ボール紙器)、包装資材、商業印刷、その他



林重衛代表取締役

■日本紙工様の会社概要と特徴をご紹介します

創業は大正9年(1920年)、今年で103年目となります。創業時は東京に本社があり、東京の巣鴨、京都等に複数の工場がありました。現在は京都に本社と京都工場があり、東海事業部、九州事業部があります。また、九州事業部の中に長崎出張所、川内工場、鹿児島出張所があります。

従業員は170名。事業の核はパッケージです。企画・デザインから製造まで全工程を社内で行っています。厚紙印刷のパッケージ製造を社内で一貫生産できるのが当社の強みで、お客様の様々な要求に素早く対応できます。長年の取引を通して築いた信頼関係により、お客様と強い繋がりを持つことができていると思っています。

お客様の業種は広範囲です。九州事業部では土産の饅頭箱、機械の部品や工具を入れる箱、医薬品関係の箱等を作っています。箱に入るものなら何でも対応するというスタンスです。

ロットの規模も多種多様です。商品名は同じでも、特別仕様や少し用途が違うものがあり、僅かな違いで毎月の製造量は何万個から数百個まで大きな違いが生じます。ロット数にかかわらず、お客様のニーズにトータルで対応できることが、当社が選ばれている理由だと思っています。



品質管理のこだわり

■日本紙工様の商品づくりでの“こだわり”は何でしょうか

当社はお客様からの直接受注がほとんどです。間接的な仕事はお客様の本当のニーズが捉えられないからです。

品質管理の面では、パッケージは印刷品質が良いだけではお客様の要求を満たしているとはいえません。色ムラが無いことが重要です。棚一面に商品を並べたとき、色ムラのある商品があると「古いのでは？」と誤解されます。

お客様の使い勝手も重要なポイントです。お届けしたパッケージに商品を入れる際、自動化された機械に適応した形状になっているか、手作業の場合は折り曲げが容易にできるか等が求められます。加えて商品がスムーズに箱から出し入れできる、蓋が閉まる等も重要な点であり、そのためには徹底した品質管理が欠かせません。

また、パッケージの良し悪しは商品の売上に大きな影響を及ぼすので、デザインや企画も重要な分野です。今は各事業部に3人程度配置し、印刷・製造部門と連携してチームとして対応しています。当社の100周年記念に配った手ぬぐいのデザインは各事業部のデザイナーが手がけました。それぞれ個性があり面白いものができました。

■日本紙工様の創業の頃についてお話し下さい

創業者は私の曾祖父 林重助です。滋賀県高島町の出身で、農家の長男だったと聞いています。兄弟が多かったため、小学校卒業後は京都の織り物屋に丁稚奉公しました。その後タバコ会社に転職、結婚もしました。ところが函館支店長だった30歳の頃、戦争でタバコが専売になり作れなくなった。「何とかせねば」という思いで東京へ行き、タバコ会社で培った「タバコのパイプ(吸い口)を作る」技術を活かし、作ったパイプを専売の会社に販売するなどしていたようです。

パイプ作りは手作業ですが、大正7年から9年にかけてスペイン風が流行して深刻な人手不足に陥りました。打開策を模索していたところ、自動的にパイプを作る機械を見つけ出しました。そしてこの機械を導入するため、同業者が数社集まり「日本紙工」という会社を設立しました。曾祖父は創業者の一人ということになります。



日本紙工様100周年記念の手ぬぐい

仕事を失うような困難に直面しても、挫けず自分で会社を作ろうと考えた重助には近江商人のような気概があったと思います。

当時から京都にも工場があったようですが、曾祖父の娘である祖母が東京生まれの東京育ちなので創業地は東京だと思います。しかし、創業3年後目(大正12年)に発生した関東大震災で東京は壊滅状態になり、本社を京都へ移しました。その後、昭和4年に名古屋、同6年に九州へそれぞれ工場を作りました。

■創業後の歴史についても聞かせて下さい

大局的に見て3つの時代に分かれると思います。30年毎に大きな変化が訪れました。

創業期は大正から戦後までの曾祖父の時代。前述の通り、タバコのパイプを製造する会社を創業後、関東大震災で京都に移り、その後は各地に工場を作りました。戦時中、印刷に事業転換し、大阪の工場を買ったり高槻に工場を建てたりしていたようです。九州事業部も本社と同様に印刷事業を行うようになり、台北に工場を作りました。

そして戦後が新しいスタートになります。若い頃にタバコ会社に勤めていたご縁から、専売公社よりタバコのパッケージ印刷を任せられるようになりました。当初のパッケージは箱ではなく、薄い紙を印刷して四角く断裁して納めていました。当時はタバコの製造工場が都道府県毎にあり、京都、東京、東海、九州に商品を納めていました。

次の転機は昭和の終わり頃です。各事業部に転換期が訪れました。大阪営業所では広告宣伝用の薄物印刷を扱っていて、主に家電量販店のチラシを請け負っていたのですが、家電量販店の社長交代で仕事が無くなってしまいました。同時期に東京営業所の薄物印刷の仕事も激減しました。

京都本社や東海事業部ではタバコのパッケージ印刷を継続していましたが、タバコ産業の民営化や包装資材の仕様変更に伴い、ソフトパッケージの生産は減少し、現在のような厚物印刷のパッケージが主力になりました。九州事業部ではタバコの仕事自体が同業者へ移ってしまいましたが、当時の九州は新婚旅行のメッカというイメージが定着した頃で、お土産商品の需要が拡大していました。そこで当社も箱物の仕事に取り組むこととし、やがてお土産用の箱をメインに作るようになりました。



食品パッケージ

工業製品パッケージ

■歴代の経営者様について教えてください

曾祖父は大正9年の創業から亡くなる昭和25年まで会社の経営に携わっていました。祖父は戦争中に亡くなっています。曾祖父の孫にあたる母は23歳位の時に父と結婚しました。父は福井県三方郡(現三方町)の農家の生まれで、結婚後に会社に入りました。私が生まれた次の年に曾祖父が亡くなり、2代目の社長は役員だった川端善四郎氏が昭和25年から同29年まで務めました。3代目、4代目の社長は外から来られた方で、政岡庄平氏が昭和29年から同41年まで、長沼徹氏が昭和41年から同61年まで務めました。当時はタバコ会社の仕事がメインの事業だったので、タバコ会社から社長となる人を招聘していました。そして5代目の社長が私の父親、林章です。昭和61年から平成4年まで務めました。

■事業承継はスムーズに行われたのでしょうか

スムーズに行われたと思います。歴代の経営者をよく知っていたわけではありませんが、役員の中に会社全体をコントロールする株主の方が複数おられたようです。創業者の親戚の方ですが、自ら社長にはならず、社長と一緒に経営を支援するというスタンスだったようです。

■5代目のお父様はどのような方でしたか

父は早稲田大学の化学科を卒業後、大手化学企業で仕事をしていました。曾祖父が跡継ぎとして探してきたのか、それとも他の誰かが招いたのか、細かな事情は知りません。しかし、父に後継者になって欲しいという願いがあったと思います。父は入社してから社長に就任するまでの期間が長かったので、社内の事情をよく理解していたと思います。

■現社長の重衛様は6代目に当たりますがその承継もスムーズでしたか

私は父の影響で化学を勉強し、京都大学の大学院に通っていました。大学院に入る前に東京の化学系の会社に勤めていたこともあります。大学院時代は父の会社を継ぐという意識は全く無かったのですが、当時は化学系の産業に公害問題が発生していて就職活動が困難な時代でした。どこか紹介してもらえないかと思っていたとこ



ワンストップサービスに対応した設備

ろ、京都大学の事務官の中に当社をよく知っている方がおられ、私の恩師に「日本紙工という会社を勧めて欲しい」と依頼されたようです。父が所属している会社と知っていましたが、当時はまだ社長でも無かったのですが入社することにしました。昭和52年のことです。今から考えると、父も私が入社するのを望んでいたのかもしれない。

入社後は東海事業部で品質管理やコンピュータ関連の仕事を10年程取り組んでいました。その後、現場指導も行いました。営業関係の仕事には携わっていません。

私が社長に就任する直前、父は病気で体調を崩していました。従って経営についての引継ぎの話はできていません。当時、私は役員に就任したばかりだったので、10歳年上で親戚の専務が継いでくれると思っていたのですが、結果的に私が引き継ぐことになりました。

私は昭和24年生まれの74歳です。今は次の時代を担う後継者候補となる人材を育てているところです。

■機械や設備の変遷も相当あるようですね

京都本社や東海事業部は印刷がメインです。東海事業部では4代目の社長の時代にラップフィルムのケースを作っていたこともあります。ラップフィルムを切る部分に使用される金属の加工は、当初は箔押しの機械を模造して1枚1枚手作業で行っていましたが、後にアメリカ製の自動化された機械を2台購入しました。

九州事業部はお土産用の箱作りがメインだったため、箱を作る機械を保有していました。また、プラグの製造会社の要望を受け、プラグの先に被せる保護用の紙パイプを提供していたこともあります。タバコのパイプを作る機械を利用して、紙を丸める作業を自動化しました。

このように、お客様のニーズに応じて必要な機械を導入してきました。これが日本紙工らしさだと思っていますが、厚紙の仕事を行っていたからこそ実現できたと思っています。

厚紙印刷を行うようになったのは、私が入社する少し前、単色機や2色機が主流だった頃、他社に先駆けて厚紙が刷れるドイツ製の4色機を導入したのが始まりです。

厚紙と薄紙では機械の構造が少し違います。薄紙用の印刷機は多くの会社が保有していますが厚紙用は少ない。そのため様々な仕事が無駄にできて自然に業態が広がりました。厚紙を印刷できることが、他社との明確な差別化に繋がりました。



本社外観

■日本紙工様が100年という長い間 事業を継続できた秘訣は何でしょうか

事業部制をとっていることが大きいと思います。独立採算に近い形のため、各事業部の特徴を引き出せます。事業部毎に固有のお客様や商品があり、例え困難に陥ってもお客様に寄り添い課題を解決してきたからこそ自社が得意な分野、有利な事業を展開することができたのだと思います。その考えは今も変わっていません。それぞれの事業部に特徴があり、情報共有することが重要だと考えています。

また、これまで会議は人が動くことで実現していましたが、コロナ禍以降、ウェブ会議が普及して便利になりました。最近は各事業部と品質的な課題について話し合うことが多く、問題点の洗い出しに注力しています。各事業部のリーダーには責任とともに自分のやりたいことを言える権限を与えています。

今は事業部制を採用していますが、創業の頃から事業所毎に個性的なことに取り組むという社風があったようです。この精神がずっと引き継がれているように思っています。

■長く続いてきた要因として 事業部制以外にもありますか

社長の承継と同様、大きな課題は複数の役員が協議して決めています。新しい機械の導入や新商品の開発、新分野への進出を行うとき、基本的には経営者の考え次第だと思っていますが、そのまま突っ走るのではなく、役員会でじっくり議論した上で結論を出します。社長のワンマン体制ではなく、役員もしっかりと経営視線を持つことが重要だと思います。

■これからの日本紙工様は どこを目指して行けますか

今後、お客様のニーズは益々多様化していくでしょう。製造工程においても、デジタル化、少量多品種生産の自動化を進めていかなければなりません。同時に事務関係の合理化も必要でしょう。新しいことに取り組みたいという思いも常にあります。それは何なのか、未だに見つかっていません。

人口は減少します。従って需要も減少します。需要が減少するのに生産を増やしても仕方がない。これまでのように印刷物が世の中に残るのか、少し心配しています。

様々なモノを入れるためのパッケージは残ると思いますが、中に入れる商品が増えるようには思えない。従って市場は当然小さくなります。

海外への輸出という方向は今後もそれなりにあるかもしれませんが、日本で作って送るのではなく、現地で安く作るという流れになるかもしれない。従って国内生産が伸びるとは思えません。

一方で、コンピュータ関連や車の電動化などの分野は市場が拡大していく可能性があります。私達はおお客様の動向をしっかり捉えなければなりません。お客様の作る商品をきちんと消費者に届ける手立てとして、私達にどのようなお手伝いができるのかを考えれば、自ずと未来は拓けると思っています。

これからも社是の通り「社会の要請にこたえ、社業を発展させ、文化と産業の発展に寄与する」ためのサービスを追求したいと思っています。それはパッケージや印刷にとどまらないと考えています。

■貴重なお話を聞かせて頂きありがとうございました

(文責・編集委員会)